昭和五十九年度

資料調査報告書　第十二集

―多田家資料―

鳥取県立博物館

序にかえて

鳥取県の江戸時代を研究しようとする者は幸せである。なぜならば当館が所蔵している鳥取池田家藩政資料がほぼ近世全期間を通じて残っているからである。この厖大な史料は汲めど尽きない歴史研究の宝庫である。

しかしながら、藩政資料にあたれば全てのことがわかるということではない。むしろ、藩政資料はそれ以外の史料とつきあわせることによって真の歴史の姿をあらわすものであろう。ところが、鳥取県では、武家や百姓町人の家文書の残存状況が悪く、また現在でも調査されないまま消えていく古文書は多い。

そのような状況の中で、当館では古文書の調査収集を行い、県民に古文書の重要性を理解していただき、また利用していただけるように、毎年「資料調査報告書」を刊行してきた。今年は、鳥取藩士多田家に伝わる古文書・古記録・歴史資料を調査し、「多田家資料」として刊行することとした。

多田家資料は、昭和四十八年より多田家の子孫である所蔵者の湯口美都子氏から当館に寄託を受けていたが、昭和五十九年九月、湯口氏の御好意により当館に御寄贈いただくこととなった。多田家資料は、当時の武家の生活や意識を知ることができる貴重な資料で、早速、当館歴史民俗展示室「歴史の窓」に領知判物・判物箱を展示し紹介させていただいた。

多田家は鳥取には跡を継ぐものがなく、子孫の湯口氏も現在大阪に在住しておられる。それぞれの家に伝わる貴重な資料が、このように鳥取を離れていくことは残念なことである。その意味で今回湯口氏から多田家資料を御寄贈いただいたことは、まことに有難いことである。改めて、感謝の意を表する次第である。

昭和六十年三月

鳥取県立博物館長　河田　晃

目次

序にかえて……1
Ⅰ多田家資料一覧表……2
Ⅱ多田家資料目録……3
Ⅲ解題……11
多田家について……11
多田家をめぐる家々……13
多田家資料について……15
あとがき……19

Ⅰ 多田家資料一覧表

第一部　古文書・古記録　一三六（一四三）

Ⅰ 領知判物　一二（一二）
Ⅱ 家譜・系図　三八（四二）
Ⅲ 用状・書状　一六（一六）
Ⅳ 家関係文書　一六（一六）
Ⅴ 武道・俳諧　九（九）
Ⅵ その他雑文書　一四（一四）
Ⅶ 写本・木版本　二五（二八）
Ⅷ 画軸・絵図・写真　六（六）

第二部　歴史資料　八（二〇）

第三部　参考資料　一一（三二）

Ⅱ 多田家資料目録

第一部　古文書・古記録

Ⅰ 領知判物

番号	資料名	文書作成者・請取人	年月日	数量	備考
1	池田照政（輝政）領知判物	多田九郎三郎宛	慶長拾・十一月五日	1	
2	池田忠継領知判物	多田九郎三郎宛	慶長拾八・十二月四日	1	
3	池田忠長（忠雄）領知判物	多田源兵衛宛	元和五・卯月十一日	1	
4	池田綱清領知判物	多田造酒助宛	元禄二・正月二十二日	1	
5	池田吉泰領知判物	多田半左衛門宛	享保十一・九月二十七日	1	
6	池田重寛領知判物	多田半左衛門宛	明和三・十二月二十四日	1	
7	池田治道領知判物	多田半左衛門宛	寛政二・九月二十七日	1	
8	池田斉稷領知判物	多田与惣左衛門宛	文化十一・十一月五日	1	
9	池田斉訓領知判物	多田半左衛門宛	天保九・八月十一日	1	
10	廩米下賜状（藩知事慶徳）	多田半内宛	明治三・五月	1	
11	知行方目録写	多田善太夫宛	寛永十・十一月二十八日	1	
12	小早川秀秋判物（知行方目録）	松野大膳宛	慶長五・霜月十一日	1	

Ⅱ 家譜・系図

13	当流系伝	三代 多田勘蔵		1	

14	多田家系	六代　多田与惣左衛門	（文化頃）	1	冊子
15	家筋書上之控帳	七代　多田久之助	天保四・十二月廿日	1	冊子
16	延宝七年・貞享四年書上写	七代　多田半左衛門	安政四・七月二十日	1	
17	覚（多田家勤行書上）	七代　多田半左衛門	安政四・七月二十日	1	
18	多田氏系図	七代　多田政信	慶応元・七月十九日	1	冊子
19	五三桐多田氏系図	七代　多田政信	慶応三・十月	1	冊子
20	家譜上（元祖ヨリ六代迄）	八代　多田綾女	（明治）	1	冊子
21	家譜下（七代ヨリ）	八代　多田綾女	（明治）	1	冊子
22	家譜一（初代ヨリ七代迄　三冊ノ内）		（大正以後）	1	折本
23	先祖祭り覚		文化十二年	1	冊子
24	当家世代法名録	多田政友写	天保十三年五月中旬	1	冊子
25	多田家先祖方法名七月盆祭り之節認控	七代　多田政信	嘉永六	1	冊子
26	盆祭り諸事覚調物献上	多田直之進政雄写	慶応元・七月十三日	1	冊子
27	盆先祖方祭祀帳	七代　多田政信	明治三・七月十三日	1	冊子
28	（多田家縁者法号調下書残欠）			5	
29	松野家由緒書	松野瀬兵衛	子正月二十三日	1	
30	松野系図			1	軸装
31	松野系図（30と同文）			1	未表装
32	松野家家譜　一　佐々木大明神之縁起			1	和綴
33	〃　二　由来記			1	〃
34	〃　六　〃			1	〃
35	〃　七　重元記			1	〃

36	松野家家譜　八　重元記			1	和綴
37	〃　九　秘事巻			1	〃
38	〃　十　関ヶ原記			1	〃
39	〃　十一　〃			1	〃
40	〃　十二　〃			1	〃
41	〃　十三　〃			1	〃
42	〃　十四　〃			1	〃
43	〃　十五　〃			1	〃
44	〃　十六　〃			1	〃
45	〃　十七　〃			1	〃
46	〃　十八　松野伝記			1	〃
47	松野之系法号書			1	〃
48	松野家墓所書付（京都妙心寺山内桂春院にあり）			1	〃
49	堀庭家家譜覚書		寛政十二	1	
50	池田治道・斉稷領知判物写	堀庭一学・堀庭河内宛		1	
	Ⅲ　用状・書状				
51	池田造酒澄古書状	多田半左衛門宛	享保八・七月廿一日	1	折紙
52	渡瀬雅楽允家督相続吹聴状	多田半左衛門宛	天保十・八月二十七日	1	
53	鵜殿主水介長道御用召状	多田半左衛門宛	慶応四・四月七日	1	切紙
54	〃　〃	多田半左衛門宛	〃　四月十日	1	〃
55	知行百五十石加増達書	多田半左衛門宛	〃　四月十一日	1	〃
56	山崎御蔵米盗難届書写	中村源三郎	午（明治三）・六月廿四日	1	二通はりつけ
57	松井源蔵隠居願写	多田半内宛	明治三・七月	1	二通はりつけ

58	桂香院他への口上（濃州勢州川々普請手伝に付き）	使者　多田半左衛門	四月十五日	1	
59	杉岡書状	志うん院宛	五月九日	1	
60	〃	志うん院宛	〃	1	
61	〃	志うん院宛	〃	1	
62	〃	〃	〃	1	
63	〃	おまき宛	〃	1	
64	桂春院月山書状	多田半左衛門宛	甲寅　五月十一日	1	
65	石河書状添状	多田宛	〃	1	
66	ひえ書状（約束の本のこと）	おくん宛	二月十日	1	

Ⅳ　家関係文書

67	寺町屋敷へ引越之節御歓帳		文政三・八月廿八日	1	横帳
68	御筒被成御預候節到来帳		文政三・七月	1	合冊
69	御筒被成御預候節御歓帳		文政三・七月	1	
70	屋敷替之節到来帳		文政十二・十月	1	冊子
71	餅の寸法		文政五・十二月廿二日	1	冊子
72	拝借住居払下願書案			1	
73	御国目付之節芸能人（武芸師範）の名前		寛延三	1	
74	給所物成代金明細	多田綾女	卯　・十二月廿二日	1	
75	慶安寺納所領収書		卯　・十二月廿八日	1	
76	堀庭長怡死亡届	寛一郎　多田宛		1	
77	改名届及許可書	多田御氏・御家臣中宛	明治二十二・六月十八日	二枚	
78	感状（日露戦争三塊石山の夜襲に於ける軍功に対して）	親戚多田綾女・高木正次　山本村夫宛	明治三十七・十月二十五日	一綴	
		多田綾女・郡長森田幹			
		第四軍司令官野津道貫　多田寅彦宛			

79	金鵄勲章並二年金弐百円授与証	賞勲局総裁大給恒　多田寅彦宛	明治三十九・四月一日	1	
80	秩禄事件に関し総代上京費領収証	小林直寛・矢嶋清五郎　多田政雄宛	大正三・五月五日	1	
81	金鵄勲章年金之証	賞勲局総裁宇佐美勝夫他　多田寅彦宛	昭和二・五月十九日	1	
82	多田寅彦弔辞	鈴木卓郎	昭和十九・五月廿三日	1	

Ⅴ　武道・俳諧

83	因結采幣（兵法）	多田綾女宛	安政四・極月五日	1	巻子
84	馬牛刺矢文懐剣之巻待縄之伝	多田半左衛門宛	明治三十・十一月	1	折本
85	雖井蛙流平法夢想萬勝之巻	吉岡寅彦宛	大正七・六月	1	巻子
86	雖井蛙流平法夢想秘極巻	多田寅彦宛	大正十五・七月	1	巻子
87	雖井蛙流免状	多田寅彦宛		1	折紙
88	雖井蛙流目録			1	冊子
89	雖井蛙（剣術蓋奥口決補註并図式）			1	〃（カーボン複写）
90	雖井蛙流平法剣術伝統総系図			1	カーボン複写
91	俳諧免許目録	伍琴庵楽天丈（多田寅彦）宛	昭和七・四月一日	1	巻子

Ⅵ　その他雑文書

92	葬礼行列			1	
93	御判形筆法改秘伝之事			1	
94	字寄作高帳大意			1	
95	見聞覚書			1	
96	世事百談抜書（食せずして飢ざるの法）			1	

97 歳中本命的殺早見之伝
98 服忌令
99 蒹葭堂雑録抜書（病気治療法）
100 告諭書　藩知事
101 池田慶徳和歌写
102 輸出入平均概算
103 日露戦争開戦の詔
104 家禄掌典禄処分に関する法律案議事録
105 覚書（半左衛門改名のこと）

Ⅶ 写本・木版本

106 玉枝集　全　多田政雄写
107 寝物語　全　多田政雄写
108 〃　〃　多田政雄写
109 御国年代記
110 鳥府志　上巻下
111 因伯村名前
112 女大学
113 習字手本
114 永代雑書
115 百人一首（蒋泉堂藤牧場潭書）
116 武家百人一首
117 御所桜梅松録

明治三・十一月	1		
明治十九	1		
明治四十四・十一月	1		
	1	折本	
	1		
	1		
	1		
嘉永四	4	折本	
	1		
	1		
	1		
	1		賞月堂主人
	1		鶴亭秀賀作・国貞画

118 京之水　上
119 〃　下
120 雅言仮名字格序
121 懐宝早字引
122 大成武鑑　御大名衆
123 有司武鑑
124 諸御役目録
125 御三家方御附
126 白石遺文　六
127 仁斎日札　二
128 新刻日本百将伝
129 絵本艶哥仙　六
130 書名不明

Ⅷ 画軸・絵図・写真

131 池田光仲筆竹之図　池田光仲
132 曜光院（多田造酒之助政英）画像
133 鳥取絵図
134 本部泰写真
135 多田綾女写真（原版とも）
136 和田きし・光写真

文化十一・十一月	1		洛下秋里舜福湘夕編
安政四・再刻	1		〃
慶応二	1		
嘉永三	1		
	1		
嘉永三・改正	1		
	1		
	1		
弘化五	1		
宝暦二	1		一勇斎国芳画
	1	軸装	池田光仲
	1	軸装	
慶応元	1		
	1		
	1		

第二部　歴史資料

1	揚羽蝶紋入朱塗盃	1	
2	揚羽蝶祇園守紋入朱塗盃	1	
3	〃　〃	1組	五枚入
4	揚羽蝶紋入銚子	1組	四枚入
5	五三桐紋章（布地金刺繍）	1組	四枚入
6	木印	1	
7	古瓦（播州雪根之神社之古瓦）	2	
8	判物箱	7	
		5	
		2	
		3	
		8	
		1	

第三部　参考資料

1	三十周年記念日露戦争回顧写真帳　軍人会館事務局	1	
2	真珠湾攻撃グラビア写真	1	
3	覚　岩井源七より藤田久之亟宛（具足修理費の覚）	11	
4	書状残欠	3	
5	諸入用覚	1	
6	雑文書	1	
7	四十連隊写真	1	
8	樗谿神社獅子舞絵はがき	1	
9	三塊石山大夜襲記念写真	1	
10	第三十九回軍旗拝受記念写真	1	
11	前権中納言菅原為定書軸	1	軸装

Ⅲ　解　題

ここに取り上げた多田家資料とは、旧鳥取藩士多田綾女家に伝わり、その子孫である湯口美都子氏から当館に寄贈いただいた資料群をいう。この資料は、昭和四十八年八月より、当館に寄託を受け、長らく当館が保管していたが、昭和五十九年九月、所蔵者の湯口氏の御好意により寄贈いただいたものである。

多田家は、明治初年に千石を給されていた大身の武家であり、また近代においては、日露戦争三塊石山の夜襲で勲功をたて、また、雖井蛙平法（剣術）の指導者としても名高い多田寅彦に関わる家である。

多田家について

多田家と池田家の関わりは、池田輝政が播州入国の際、多田家の先祖多田半右衛門を召出したことに始まる。それ以前については、「家譜上」（史料20）によれば、「清和源氏多田満仲ヨリ十一代孫政義ヨリ継、多田四郎左衛門政親男半右衛門、初仕早川主馬、後仕羽柴久太郎秀政、有暫間退羽柴家、池田三左衛門輝政公於播州姫路被召出」とあり、摂津を本拠にした多田源氏の系譜をひくこと、半右衛門の代に、早川主馬、羽柴（注）（堀）秀政に仕え、関ヶ原戦後、池田輝政播州入国の際に召出されたことが伝えられている。

半右衛門の家督は嫡子三郎次郎が継いだが、二男九郎三郎は輝政御児小姓に召出され、別家としてたてられることとなった。この九郎三郎を初代とするのが、本資料を伝えた多田家である。以後、多田家は次のように継がれていく。（系図参照）

初代九郎三郎　　慶長十年（一六〇五）～寛永十三年（一六三六）
二代九郎三郎　　～延宝七年（一六七九）
三代勘蔵（養子）　～貞享四年（一六八七）
四代吉之進（養子）　～寛保元年（一七四一）
五代繁之助（養子）　～寛政七年（一七九五）
六代市郎次　　～天保二年（一八三一）
七代久之助（嫡孫）　～明治三年（一八七〇）
八代綾女　　～

（年代は家督を譲る年代）

なお、本家にあたる半右衛門嫡子三郎次郎の継いだ家も、以後代々鳥取池田家に仕え、藩政資料藩士家譜の多田正敏家にあたる。

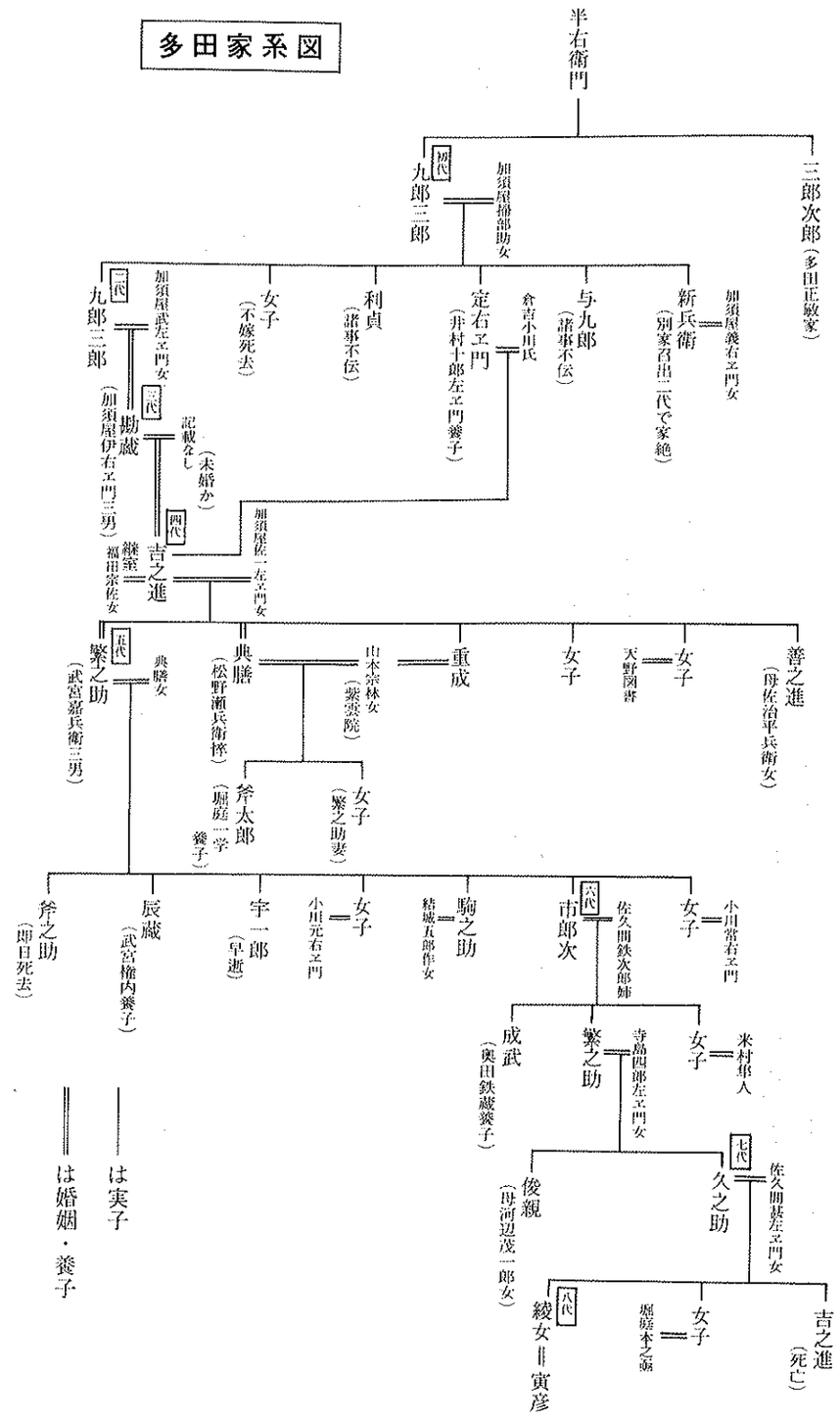
初代多田九郎三郎は、二〇〇石で召出され「御穏密之御書調申候御役儀」をつとめた。池田忠継・忠雄と仕え、御国替により鳥取へ移った。鳥取では二〇一石六斗五合の知行である。

二代九郎三郎は初代九郎三郎死後、江戸御児小姓役をつとめたあと、代官・御郡奉行をへて、最後は御納戸御銀奉行となる。

三代勘蔵は、養子で養父九郎三郎の名代として延宝三年（一六七五）より出仕し、大殿様御勘定頭・裏判、御納戸御銀作廻の三役を勤めた。

四代吉之進は、養子のため一五〇石に知行を減少させられたが、大殿様（光仲）の御児小姓として、江戸に三度供をし、元禄五年（一六九二）三〇〇石に加増され、光仲死後剃髪したが、御用人役、若殿様御傅役を歴任し、一〇〇〇石まで石高を上昇させた。この吉之進の時、実子重成の早逝により、京都の近衛家に仕える松野瀬兵衛悴の典膳を養子としてむかえ、実子重成の室山本宗林女と婚姻させた。多田家資料中に多数の松野家関係資料があるのはこの関係からである。しかし、典膳は部屋住のうちに死亡してしまったため、吉之進は武宮嘉兵衛三

多田家系図



男繁之助を養子に迎え、典膳の女子を室とした。

五代繁之助は養子につき八五〇石となった。養父吉之進ほどの活躍は見られないが、江戸御番頭などを勤めている。

六代市郎次の事跡はほとんどつたわっておらず、文政三年に格式が馬廻りから物頭に上がったことがわかる程度である。

七代久之助は、市郎次の嫡孫である。幕末にいたって、米子御城番・表御用人・江戸御留守詰などをつとめ、慶応元年（一八六五）智頭番所番頭、さらに用瀬番所へ出向き、明治二年（一八六九）には番所が廃止されたため一時土着する。その間明治元年に、一〇〇〇石に知行を復している。

八代綾女は、親久之助が隠居して家督を相続し、土着番頭御免となっている。

多田家資料を見ると、役務に関わるものが非常に少なく、家譜・系図類が多いことに気づく。その家譜類は、七代・八代の頃に書かれたものが多い。もちろん他に散逸してしまった文書が多いことは想像されるが、幕末から明治の激動期に、政治の荒海にとびこむことより、自分の家をいかに維持していくかを考えた家だったのではなかろうか。それゆえに幕末維新期の武家の、家の崩壊に対する深刻な不安を見ることができよう。

八代綾女を継いだのが、多田寅彦である。多田寅彦は、旧姓吉岡寅彦で、幕末の二十士事件に参加した吉岡正臣の子であり、多田家に養子に入った人である。明治十三年（一八八〇）に生まれ、明治三十二年（一八九九）陸軍教導団歩兵科を卒業し軍人となる。明治三十九年（一九〇六）に召集解除となるが、その間日露戦争の三塊石山の戦で勲功をあげ、金鵄勲章を授けられた。その後明治四十年（一九〇七）より鳥取県雇になり、内務部学務課に勤務、のち鳥取県立商業学校書記となる。大正元年（一九一二）には因伯尚徳会武術教授を兼ねる。大正八年（一九一九）には倉吉に生活する。昭和十年（一九四四）死亡。多田寅彦は幼少の頃から岡崎平内の雙樅館で剣道を修業し、鳥取県武芸史において、雛井蛙流平法（剣術）を岡崎平内―鈴木源太郎から継承した重要な人物である。

注　羽柴（堀）秀政　初め美濃斎藤氏の家人。信長に仕え、秀吉領跡近江長浜城主となった。信長死後、秀吉に属し、山崎の戦・賤ヶ岳の戦・長久手の戦に参戦し活躍。天正十三年（一五八五）羽柴の氏と豊臣の姓を授けられた。小田原の役に出陣したが陣中で病死した。秀吉の鳥取城攻めの時、摩尼寺を焼き払った人物と伝えられている。

多田家をめぐる家々

多田家資料の中には、他家に伝来した資料が多田家に移って保管されていたと考えられる資料がある。そのほとんどは、松野家に伝来した資料で、小早川秀秋判物(12)・松野家由緒書(29)・松野系図(30 31)・松野家家譜(32～46)がそうである。松野家と多田家の関係は、元文元年（一七三六）、多田家四代吉之進が、松野瀬兵衛悴典膳(政光)を養子にむかえたことが史料からわかるが、それ以前については不明である。

松野家は、もと美濃国にあり、戦国末期の松野岸助までさかのぼることができる。以後平助旦元（天正十年信長の為自害）・平八（天正十五年筑紫において討死、実は旦元の弟）・主馬重元（実父は馬淵吉綱、平八の養子となる）と続く。重元の事跡は「松野家家譜七・八重元記」に詳しく、年表風に列挙すると

天正　元（一五七三）　誕生
天正　三（一五七五）　松野平八に養われる。
天正　七（一五七九）　信長に仕える。
天正十三（一五八五）　秀吉に仕える。
天正十九（一五九一）　丹波国多喜郡のうち二庄を拝領。
年不明　中納言秀秋（小早川）へ仕える。
慶長　五（一六〇〇）　大名に取立てられる（一万石以上の拝領か）。
慶長　八（一六〇三）　小早川秀秋家断絶。筑後田中兵部太夫に三千石で召抱えられる。
慶長十七（一六一二）　田中忠政死去、断絶。江戸へ罷出る。
元和　七（一六二一）　土井大炊頭取持で、五千俵下され旗本となる。
元和　八（一六二二）　幕命により、駿河大納言忠長へ。五千石、駿府へ罷越す。
寛永　十（一六三三）　忠長死去。断絶に付、他の家臣は高崎へお預けのところ、重元は浪人し、駿府に残る。のち大津に居宅をかまえる。
正保　二（一六四五）　越後村上城主本多能登守へ御預け。百人扶持。のち、奥州白川へ所替。
明暦　元（一六五五）　死去。八十三才。

まことに波乱に満ちた一生である。重元には男子六人がいるが（うち一人は早逝）、多田家とかかわるのは、五男重時の家系であり、先にあげた松野瀬兵衛は、重時の息子である。重時は、父重元が本多家に仕えたとき、同行し、後四百石の知行を得る。本多家の領地である大和国郡山の中老職となり、郡山に居住し、元禄十年に病死した。息子瀬兵衛は跡をつぎそのまま郡山に居住したが、享保7年本多家が断絶し、浪人している。享保十七年と推定される松野瀬兵衛の書いた「松野家由緒書」によれば、「和州郡山浪人、松野瀬兵衛」とあるから、近衛家に仕えるのはそれ以後で、元文元年には近衛家に仕えている。

元文元年松野瀬兵衛は悴典膳を多田吉之進の養子とした。多田吉之進には二男二女があったが、長男は早逝し、次男重成に山本宗林女（紫雲院）を室としてむかえたが、重成が死亡したため、山本宗林女に松野典膳を婿養子にむかえたのである。典膳は一男一女をもうけたが部屋住のうちに死亡してしまったため、武宮嘉兵衛（鳥取藩士）三男繁之助を養子にむかえ、典膳の女子を室とした。

松野家のその後については明らかでないが、「寛政十二年松野家墓所書付」によれば、松野家は断絶し、墓を祀る人もなくなっており、最も近い縁者が多田家であった。松野家関係の史料がいつ多田家にわたったのか明らかでないが、内容に、松野瀬兵衛以後の記述がないことから、松野家は瀬兵衛の代でとだえ、その前後に多田家に移ったのであろう。

また松野典膳の残した男子は、堀庭一学家へ養子にむかえられた。堀庭弁之助である。史料番号49・50の文書はその関係から多田家に伝わったのであろう。

「多田家について」でふれたように、多田家には本家筋にあたる多田正敏家がある。しかし、多田家資料の中には、両家がどのようなつきあいをしていたのかを示すような資料はない。

多田家家譜類からわかる婚姻や養子縁組の相手を見ると、加須屋掃部助・義右ヱ門・猪右ヱ門・佐一左ヱ門・井村十郎左ヱ門・円山勘解由・堀庭一学等の名があり、いずれも多田家と同じく慶長年間に輝政によって召出されている家臣の家である。当時の婚姻・養子縁組が家格を規準にして行われていたであろうことは十分予想されるが、鳥取

藩の場合、召出され方の異なるいくつかのグループがあり、それも姻戚関係をつくる際には考えられたのであろう。

多田家資料について

多田家資料の特色は、武家文書であるが、職務上の文書はほとんど残っておらず、私的な家としての文書が多く残っている点であろう。武家としての存在証明である領知判物、家の歴史を丹念に記録した家譜系図類、屋敷替や御筒御預の時の到来帳、あるいは正月の餅の大きさまで子孫に伝えた「餅の寸法」（71）など、家として子孫に伝えなければならないと考えられたことを記録して伝えている。したがって、近世の武家の家意識といったものを考える上で興味深い資料であるといえる。以下、多田家資料のうち、主要な資料について解説する。

1　領知判物

多田家資料の領知判物は、多田家に与えられたもの十一点と、松野家から伝わった「小早川秀秋判物（知行方目録）」一点である。領知判物は、藩主の交代の度に渡されるものであるが、

判物箱（歴史資料8）

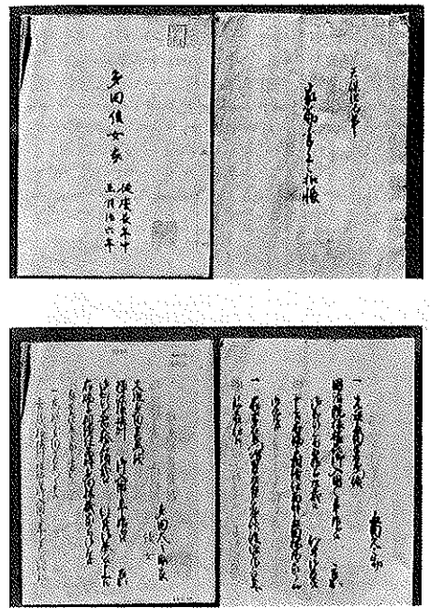
鳥取藩では池田光仲以後十二代の藩主のうち、判物を与えたのは初代光仲、二代綱清、三代吉泰、五代重寛、六代治道、八代斉稷、九代斉訓、十二代慶徳の八人で、他の藩主は、判物を下付する以前に死去したため、判物は与えていない。多田家資料の判物には、鳥取入部以前の池田輝政・忠継・忠雄の判物は残されているが、光仲と慶徳の判物が失われている。しかし、判物の変遷を示す好資料である。また、判物を入れる判物箱も残されている。

2　家譜・系図

多田家文書の中心をなす資料群で、多田家関係・松野家関係・堀庭家関係に分けられる。

多田家関係家譜類で注目されるのは、当館が所蔵している藩政史料藩士家譜と関係する点である。「延宝七年・貞享四年書上写」（16）は、安政四年の写であるが、内容から延宝七年（一六七九）と貞享四年（一六八七）に自家の歴代の事跡を藩に提出していることがわかる。また「家筋書上之控帳」（15）は、天保四年（一八三三）に藩に提出した書上の控である。藩政資料藩士家譜の成立については、福井淳入「鳥取藩家臣団形成期の諸問題」（『鳥取県立博物館研究報告』第20号一九八三年）の「2、藩士家譜と古分限帳」に詳しいが、多田家資料は、武家側から藩士家譜の成立をあとづけられる史料である。先の「家筋書上之控帳」は、現在残っている藩士家譜三種五組のうち、天保年間に編さんされ、明治になって追加された明治四年までの家譜の、天保までの部分の元になる資料である。この二つの史料を比較すると、主要な相違点は、藩士家譜は家筋書上をもとにしながら、「貞享四年家之書出」「御櫓家譜」（享和三年家譜・文政十年家譜）を朱書で引用していることである。また、細かく比較すれば、家筋書上で「国清院

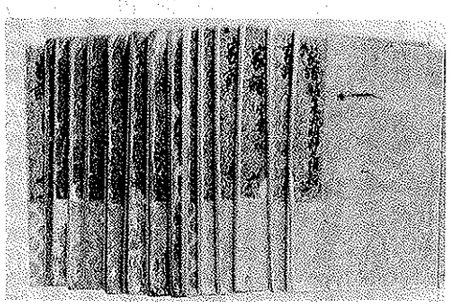
様」となっているのを、藩士家譜では「輝政様」と直していること、各代の最初の行を「一　何代某」と一行にし、事跡を次の行から書くように統一していることなどがわかる。これは他の藩士家譜と同様の書式となるよう統一したのであろう。しかし、これらの相違の他には、藩士家譜は、家筋書上をほぼ正確に写しており、編さん者が事実を書き改めたり抹消したりしていることはないようである。また、「貞享四年家之書出」が朱書で引用されていることから、現在では失われているが、天保段階では、貞享年間に各家から提出されていた書上も残っていたのだろう。



「多田綾女家家譜」（左）と「家筋書上之控帳」（史料番号15）

松野家関係については、十五冊の「松野家家譜」（32～46、本来は十八冊だが三冊が欠けている）がある。和綴されて、書籍風である。内容は、氏神のことを記した「佐々木大明神縁起」、家のしきたりや紋章などを記した「由来記」、戦国時代から江戸初期に生きた松野重元の事跡を記した「重元記」、関ヶ原の戦を書いた「関ヶ原記」等である。「関ヶ原記」の序に「正徳六年　豊臣重吉」と記されており、豊臣重吉は松野瀬兵衛のことである。したがって、この十五冊の家譜の成立は正徳頃で、松野瀬兵衛によって記されたのであろう。松野家については既にふれたが、その経歴から、家譜の中に鳥取に関する記述はない。しかし、「重元記」の中に宮部善祥房に関するエピソードが記されているので紹介しておこう。

秀吉の朝鮮出兵の際、小早川秀秋の付人として松野重元とともに朝鮮にわたった龍野間五郎という七千石を領する武将がいたが、間五郎が小屋の焼跡を見廻っていた時、たまたまその小屋にあった鉄砲に火が移り暴発し、間五郎の腹を打抜き、間五郎は即死した。重元は帰国してそのことを宮部善祥房に話すと、善祥房は「間五郎ハ左様之死を致さで不叶人也」と言った。重元が、そのような不慮の犬死を兼てから知っていたというのは不



松野家家譜（史料番号32～46）

思議なことだと善祥房に問えば、善祥房は、間五郎は弓矢の事を我等に問い多くのことを伝え受けたが、それは多くの人の生死をきめる秘事大事であるのだが、それを多くの人に語り散らしていたので、摩利支天の罰があたらずにはすまないのだと答えたという。戦国期の武将らしい宮部にかかわる伝承である。

3　池田光仲筆竹の図

「拝領品池田光仲公御真筆」と書かれた木箱におさめられている。竹の絵に「光仲」と署名されている。「多田綾女家譜」には、光仲からこの図を拝領したことは記されていない。一方、「多田正敏家譜」に、三代伝八郎が「光仲様御側数年相勤、蒙御懇命、品々拝領物仕候内、御鏡、御戯之御書頂戴仕居申候」とある。光仲筆竹の図は、少し稚拙で「光仲」の文字も若年の字と推測され、「御戯之御書」にふさわしい。「多田正敏家譜」の「御戯之御書」が、この竹の図を指すのかもしれない。何らかの事情で、多田綾女家に移ったのであろうか。ただし、多田綾女家四代吉之進は光仲側近に仕え、光仲の厚遇を得ていたことは、家譜や石高の上昇を見ても明らかであり、多田伝八郎の拝領したものとは別に、竹の図を拝領したのかもしれない。

池田光仲筆　竹之図（史料番号131）

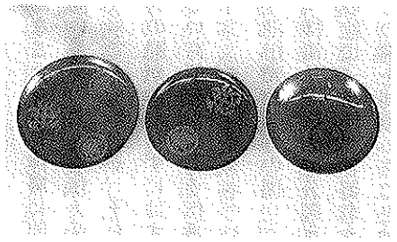
4　多田寅彦関係資料

多田寅彦に関する資料は、家関係文書の中の、日露戦争三塊石山の戦の軍功に対する「感状」（78）、「金鵄勲章並二年金弐百円授与証」（79）など、軍人としての多田寅彦に関わる資料と、「雖井蛙流平法夢想萬勝之巻」（85）などの雖井蛙流平法（剣術）に関わるものが主である。鈴木卓郎の「多田寅彦弔辞」（82）にも、軍人として功を上げたことと、剣術のことしか述べられていない。おそらく、多田寅彦の人生自体が、前半生は軍人としての生活、後半生は学校教育や因伯尚徳会を通しての、武道を修め、教育する生活が主なものだったために、このような資料の残り方をしたのだろう。剣術関係については、すでに当館『資料調査報告書第十集武道関係資料』で紹介した。また多田寅

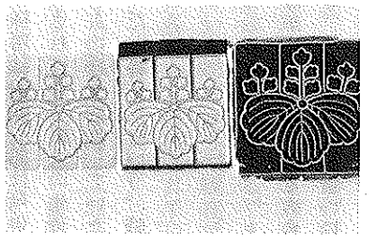
揚羽蝶紋入銚子（歴史資料4）

彦の鳥取県武道史上の位置については、山根幸恵『鳥取藩剣道史』に記述がある。多田寅彦が大正八年（一九一九）から勤務した倉吉中学校の後身である倉吉東高等学校に、彼の履歴が残されている。

耀光院（多田造酒之助政英）画像



朱塗盃（歴史資料３・２・１）



五三桐紋章（歴史資料５）

歴史の窓展示風景（領知判物と判物箱）

あとがき

当館が多田家資料をはじめて調査したのは昭和四十八年七月であった。当時、鳥取市は、天正六年、因幡守護山名豊国が、布施天神山から久松山に城を移してから四〇〇年に当るとして、「城下町鳥取誕生四〇〇年」の記念事業として鳥取市の歴史展を開催する準備をしていた。その展覧会の企画の中心は故川上貞夫氏であり、田中貢氏が実施の担当者であった。

当館の協議会委員でもあった川上氏は、多田家に池田光仲の幼少時代の竹の図があることを知っておられ、我々にぜひ多田家を調査するようすすめられ、調査に出かけた。

馬場町の多田家には、老令の多田ともさんが一人住いであり、近く孫娘に当る湯口美都子さんのところへ移るという話しであった。

多田ともさん、湯口さんに、この資料を何とか鳥取に残したいと話すと、快く当館に寄託してくださった。

早速、館に持ち帰り、一応の整理をして仮目録を作成し、寄託手続を完了した。以来今日まで、当館が保管していた。この間、先にのべた鳥取市の展覧会に光仲の竹の図外数点の史料が出品され、多くの市民に披露された。

残念なことに、多田ともさんは、豊中の湯口さんの所へ移られて間もなく他界された。また川上貞夫氏も他界された。多田家資料が当館に入るきっかけを作られた御二方とも今はない。謹んで御二方の御冥福をお祈りする次第である。

湯口さんが今度、多田家資料を御寄贈くださったのも故里を思い、先祖を思ってのことであろうと思う。当館としても大切に保存し有効に利用して、この志に報いたいと思う。

本調査報告書の作成にあたって、昭和四十八年当館に寄託を受けた際に、福井淳人・山根文子によって作成されていた仮目録をもとに、坂本敬司・福井淳人が再整理を行い本報告書を作成した。

不備な点が多いことをお詫びするとともに、湯口美都子氏の御厚志に改めて感謝する次第である。

昭和五十九年度
資料調査報告書　第十二集
――多田家資料――

昭和六十年三月二十日　発行
鳥取県立博物館
〒680 鳥取市東町二丁目一二四
電話　二六―八〇四五